

氏名	おかだ ゆか 岡田 有加
学位の種類	博士 (医学)
学位記番号	甲第 1250 号
学位授与の日付	2021 年 3 月 21 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	Impact of Fluoropyrimidine and Oxaliplatin-based Chemoradiotherapy in Patients with Locally Advanced Rectal Cancer (直腸癌術前化学放射線治療におけるオキサリプラチンの上乗せ効果の検討)
指導教員	教授 橋口 陽二郎 (板橋・外科学講座)
論文審査委員	主査 教授 小林 宏寿 (溝口・外科) 副査 病院教授 横川 徳造 (ちば・放射線科) 副査 講師 小杉 千弘 (ちば・外科)

論文審査結果の要旨

学位審査論文「Impact of Fluoropyrimidine and Oxaliplatin-based Chemoradiotherapy in Patients With Locally Advanced Rectal Cancer」は、in vivo (IF:1.541)に掲載が予定されている、申請者を筆頭著者とする共著論文である。

直腸癌は結腸癌と比較して、局所再発率が高く予後不良で知られる。そのため、局所再発を制御する目的で欧米を中心に術前化学放射線治療を行うことが標準治療となっている。その際に放射線治療の効果を促進する目的で使用される化学療法としては、フッ化ピリミジン系薬剤単剤での使用が一般的であった。しかしながら、更なる治療効果を期待してフッ化ピリミジン系薬剤にオキサリプラチンを付加した治療に限られた施設で行われている。今回申請者らは、直腸癌における術前化学放射線治療例においてフッ化ピリミジン系薬剤単剤群とオキサリプラチン併用群における治療成績について検討した。

対象は術前化学放射線治療を施行した直腸癌 100 例である。3 年無局所再発生存率に関連する臨床病理学的因子について統計学的に評価した。

オキサリプラチン併用群は 26 例、フッ化ピリミジン系薬剤単剤群は 74 例であった。オキサリプラチン併用群において術前化学放射線治療の完遂率が有意に低くなっていたものの、完遂できた症例においてはフッ化ピリミジン系薬剤単剤群よりも優れた局所制御能を有することが示唆された。

本論文では、オキサリプラチン併用術前化学療法放射線治療が完遂できるかどうかの予測因子として ROC 曲線を用いて好中球数が有用である可能性を示唆した点で優れている。一方、後方視的検討であり、selection bias の可能性があること、またオキサリプラチン投与例が 26 例、非投与例が 74 例と比較的少数での検討であることから、今後症例を増やしての再検討が望ましいと考える。

本研究の倫理面に関しては、帝京大学倫理委員会の承認のもとに行われており、問題ないものと判断した。

2021 年 1 月 7 日に行われた学位審査会において申請者は当該領域の十分な知識と経験を有していることが確認された。

以上より、学位授与可と考える